

鑿と錠

江戸時代、水不足に対応するため、人力で岩を砕き石を掘って水を引いてきた人たちがいました。使われたのは鑿（のみ）と錠（つち）でした。愛媛県西条市の劈巖透水（へきがんとすい）と香川県さぬき市の弥勒石穴（みろくせつけつ）の例をご紹介します。

■劈巖透水（愛媛県西条市）

来見（くるみ、現西条市丹原町）本田のかんがい用水は来見堰で中山川の水を取水していましたが、設備が不完全なため農民は水不足に困っていました。これを嘆き、来見村の庄屋越智喜三左衛門は、松山藩に再三にわたり修繕改築工事を願い出ましたが許可が得られず、居宅や田畑を売り私財を投じて安永 9 年（1780）に工事に取りかかりました。自らも鑿を握り、錠を振るいました。岩盤を砕き続けること 9 年の歳月をかけて、寛政元年（1789）に長さ 12 間（21.7m）の井堰と 20 間（36.2m）の隧道及び 76 間（137.5m）の岩石打割水路が完成したと伝えられています。その後、明治に入り、子孫で中川村長の越智茂登太らにより増築工事が行われ、中山川の水が来見本田の 30 町歩を潤してきました。<西条市水の歴史館ホームページ、門田恭一郎「愛媛の水をめぐる歴史」2006 年など>



■弥勒石穴（香川県さぬき市）

弥勒池では、文政 11 年（1828）に津田川の水を碎石（われいし）から弥勒池まで導水する全長約 2.6km の掛井が完成していましたが、漏水や掛井の高低差などにより弥勒池まで水が十分に届いていませんでした。嘉永 5 年（1852）に 25 歳で富田中村の庄屋になった軒原庄蔵は、津田川と弥勒池を隔てる三つ石山に石穴を通して導水することを考えました。庄蔵は高松藩に工事の許可を願い出て、安政 2 年（1855）に藩から石穴掘抜方御用掛に任命され、工事に取りかかりました。設計は数学者の萩原栄次郎が行い、工事監督は画家の多田信蔵が担当しました。庄蔵は家や土地を売って資金を捻出し、庄蔵の熱意に応じて石工たちは昼夜 12 人交代で掘り進めました。長さ 105 間（189m）の石穴は、工事開始から 2 年 4 か月後の安政 4 年に貫通しました。<讃岐のため池誌編さん委員会編「讃岐のため池誌」2000 年、香川県教育会編「さぬき・人・ここにあり」2013 年など>

